要　旨

『冥途の飛脚』再考

9N14003
森田　萌子

世話物『冥途の飛脚』は、正徳元年七月以前、大坂竹本座で初演されたと推定される。

新町の遊女梅川と馴染んだ亀屋忠兵衛は、梅川を田舎客と競り合って、友人八右衛門の公金五十両を身請けの手付金に流用した。八右衛門は忠兵衛の頼みに応え、善意で公金返済の猶予を与えた。八右衛門は、忠兵衛を廓に寄せ付けないようにするため、廓で窮境暴露をした。公金流用許諾時と窮境暴露時の八右衛門についての見解は、大久保忠国氏や重友毅氏などの敵役ではない善人が誤解から確執を生むと捉える見解と、富田康之氏などの性格や言動の矛盾を認める見解がある。八右衛門の窮境暴露を戸口で聞いていた忠兵衛は、梅川の面目と自身の一分のために封印切を犯した。これは、八右衛門が忠兵衛と梅川が不在だと思い込んでいたために起きた不幸だ。八右衛門の窮境暴露は、八右衛門が深く忠兵衛のことを考えずに社会的に正しい行いを善意で行った結果招かれたことで、公金流用時同様に一貫して善人の統一的な行動と捉えるべきだ。封印切の際に八右衛門や梅川が踏みとどまらせようと諭すように、忠兵衛以外は、皆後先のことを考えて行動した。一線を超えた行動を選択する結局の主体は忠兵衛自身だ。封印切後、忠兵衛は公金で梅川を身請けして、共に故郷の新口村に向かった。孫右衛門については、廣末保氏が主人公の中心の悲劇に対して巻き込まれる者の「従属的悲劇」を述べる。また、大久保忠国氏の理想的姿と讃美する見解と田辺幸雄氏の浪花節的情緒悲劇と賛美しない見解がある。私は孫右衛門の「従属的悲劇」は、忠兵衛と梅川を語る上で欠かせないものだと考えており、大久保氏に賛同している。近松は新口村の場で、梅川に忠兵衛の父親の孫右衛門と対面させ、彼女が忠兵衛の嫁として認められるという慈悲を与えた。『冥途の飛脚』では、忠兵衛の封印切の責任を問われる亀屋の悲劇等を描かず、忠兵衛と梅川に同情を見出し、悪人とし

て描かない意思を持っていたのだ。

『冥途の飛脚』の八右衛門は敵役ではない。『近松門左衛門集②』（小学館）「解説」で『堀川波鼓』敵役床右衛門が「主人公を破滅へと触接的に導かな」くなったと敵役の役割の変化を指摘する。『冥途の飛脚』はドラマの主筋において、敵役の役割が変化した先行作品の要素を組み込んでいる。近松世話浄瑠璃における敵役不在のドラマは『冥途の飛脚』時点で一定以上の成熟を迎える。その後、『生玉心中』『心中天の網島』等、敵役不在の物語が定型化し、敵役が主題に影響せずとも物語が成立するようになった。『冥途の飛脚』の八右衛門のように近松の他の世話物でも主人公たちに善意を持って積極的に介入してくる第三者が存在する。善意による介入者には、〔1〕社会規範に準じる行動、〔2〕当事者の意向に添う世間の常識を度外視した行動、〔3〕自身の心情のための行動という介入意図があった。彼らは、それなりに主人公の立場で考えて行動するが、主人公に内密でそれぞれが勝手な思い込み行動に移すため、悲劇を招き、結果的には主人公を追い詰める。良い方向に向かうために善人が努力した結果、不幸を招くという善意による介入は、外的要因がなく内部崩壊する『淀鯉出世滝徳』で転換期を迎え、『冥途の飛脚』で円熟する。これ以後、定型化し、『心中天の網島』等で先行作品の焼き直しがされた。物語を円熟させるために、敵役に代わって近松が設定したのが善意による介入だ。廣末保氏が「従属的悲劇」について指摘するが、これは、善意による介入が敵役に成り代わった際に副産物として生まれたドラマであろう。

忠兵衛と梅川は犯罪者とその原因である。遊女の身の上に同情を寄せる『三世相』の作中引用や梅川を孫右衛門と対面させる慈悲を与える場面の描写等から、近松が二人に責任を追求する作品として『冥途の飛脚』を描かなかったことがわかる。『冥途の飛脚』八右衛門のように、近松の世話物では正論の暴力を描き、社会規範に反する人々をすくい上げた。敵役を排し、善意による介入者に物語の転換者としての役割を与えたことで、どこにも責任の所在を求めることのできない息苦しさが生んだ不幸を効果的に表現している。そのひとつの成功例が『冥途の飛脚』である。